うららかな ひ

艶陽天 III

浩然 著
伊藤晃 訳

艶陽天（うらかなひ）

Ⅲ

浩然著・伊藤克訳

青年出版社

訳者紹介

伊藤　克（いとう かつ）

1915年東京に生まれる。1934年淑徳高等女学校卒。1936年より1961年まで中国に在住。1955年中国作家協会瀋陽分会会員。1956年より北京人民文学出版社特約翻訳家となる。現在中国文学翻訳家として活躍。
主要訳書――鮑秀蘭というペンネームで日本語訳，陳登科『活人塘』，白朗『幸福なる明日のために』。蕭蕭のペンネームで中国語訳，『樋口一葉小説選集』，島崎藤村『夜明け前』，『徳永直選集』，『宮本百合子短篇小説集』，野間宏『真空地帯』等，帰国後，伊藤克として，呉源植『金色の山々』，胡万春『光は大地を照らす』，馬憶湘『赤軍の娘上・下』，金敬邁『欧陽海の歌上・下』，工農兵故事会編『ものがたり紅灯記』，中国青年出版社編『中国青年英雄伝Ⅰ』，高玉宝『高玉宝』，鄭加真『北大荒賛歌上』，浩然『艶陽天Ⅰ～Ⅷ』。

艶陽天（うららかなひ）　Ⅲ　　定価 980円

1973年9月15日　第1刷発行
1974年6月30日　第3刷発行

著者　浩　然
訳者　伊藤　克
発行者　福井　肇

発行所　東京都千代田区神田錦町1～4　株式会社　青年出版社
電話（291）1189　振替 東京 49658

0097-070642-3835

第Ⅲ巻目次

第三十三章……531
第三十四章……544
第三十五章……562
第三十六章……575
第三十七章……592
第三十八章……610
第三十九章……624
第四十章……643
第四十一章……659
第四十二章……671
第四十三章……682
第四十四章……696
第四十五章……712
第四十六章……728
第四十七章……745
第四十八章……760

第四十九章……776
第五十章……790
第五十一章……805
（第一部完結）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第三十三章

夜中すぎに、やっぱり豪雨になった。ひと雨すぎたあと、空は晴れあがり、いつにもまして爽やかな朝が訪れた。

昨日の夜、この辺鄙な山村で、あっち、こっち、あの家、この家、あの人、この人のあいだで起こった愉快な出来事、または不愉快な出来事は、雨と共にそっくり洗い流されてしまったように見える。

雨雲が晴れ、霧が消え去るころ、女たちは朝星をいただいて起きあがり、柴を抱えて来てかまどの火をたく。家々の屋根からは、いつものように炊煙がたちのぼる。男たちはしぶい眼をこすりながら、水桶をかついで公共井戸にかけつけて、ぎいぎいろくろをきしませながら水を汲む。まもなく、韓百旺がいまできあがったばかりの豆腐を大通りにかつぎだして、声をはりあげて売り歩く。馬老四はいつものように草をもちこみ、えさをかきまぜ、にこにこと顔で家畜のせわをやきはじめる。唖もいつものように羊の群れを追って、石ころ道を山へ出かけていく。韓徳大は耕牛を追って金泉河ぞいに砂州へ出かける。焦振茂と韓百安もいつものように廟の院子で、かっつん、かっつんと木材をけずりはじめる。つづいて洗面と髪の手入れを終えた馬立本が、これまた、いつものように事務所で算盤をはじきだす。馬之悦もいつものように村のあちこちを歩きまわって、仕事の点検をはじめる。韓百仲は社員をひきいて、粟の苗畑を鋤きにいく。馬連福はあいも変らず社員たちに早く出かけろとどなりはじめる。焦淑紅たち一群の青年男女は、馬翠清、韓道満をふくめて、いつものように苗圃へやって来て、労働したり談笑したりしはじめる。

……

人のいるところには、すべてはつらつとした労働があり、労働の喜びがある。

冷静に見れば、東山塢は平和で静穏な村だった。しか

し、だれが知っているだろう、昨夜のあいだに、ここで起こった種々さまざまな矛盾と摩擦、それがいまもなお継続し、発展していることを？

そのころ、一台の自転車に相乗りしたふたりの男が、麦畑のまん中を走っている大八車の駄道にそって東山塢めがけてまっしぐらにやって来た。ふたつの車輪は雨にしめったあとの砂地を早い速度で回転しながら、砂粒を巻きこみ、すぐにふり落し、心地よいざ、ざ、ざというひびきをたてている。黄金色の麦の穂波はしめった息吹きを発散させながら、かれらの身辺で大きく揺れている……

苗圃で畑仕事をしていた焦淑紅がまっ先にそのふたりを発見した。かの女は腰をのばすと大喜びで笑いながら、かたわらの馬翠清をふり返っていった。

「あんた、みなをひきいてやっててね。王書記が来たのよ、戻って見てくるわ」

若者たちはみな立ちあがって、歓迎と興奮のまなざしで自転車の男たちを眺め、手をたたいて叫んだ。

「よかったあ！　王書記が来たからには、あいつらの騒ぎをきっと鎮めてくれるわ！」

「あいつらに、まだ馬鹿騒ぎをする度胸があるかってんだ！」

焦淑紅は河辺にかけよって、水をすくって手を洗った。かの女の快活な心は、まるでせせらぐ河水のように喜びにあふれていた。王国忠はかの女の願いどうりに来てくれたのだ。それに、来たのはひとりではなく、まるで数十人、数百人の援軍が来たようにかの女には思われた。いや、数十人、数百人の援軍が来るよりももっと意気のあがる、力強いものを心に感じていた。昨夜、蕭細胞書記と王書記のふたりは、きっと寝もやらずに工作の方法をぜんぶ研究し終えたに違いない。かれらが村に来て行動を起こせば、すぐに新らしい局面が出現するだろう。ふたりの書記の来臨は、かの女に必勝の確信を深めさせた。手をふって水玉をふり払うと、かの女は足どりも軽やかにポプラと柳の林を通りぬけた。大八車の駄道に迎え出るのではなく、近道をして村に戻ってまつことにしたのだ。

自転車はすでに小橋をわたっていた。

まえでペタルを踏んでいた王国忠がふり返って蕭長春にいった。

「老蕭、今年はおまえたちの麦は、すばらしいできだな！」

うしろの荷台に乗っている蕭長春が笑ってこたえた。

「だから、このおれは、天下は大平だってとなえだしたんですよ」

王国忠がいった。

「豊作はなんといってもおれたちの希望だ。同時におれたちが闘争するための有利な条件だ。そうじゃないかね？」

「もちろんですよ。去年に比べて、おれはこう思ってるんです。仕事をするのに度胸が坐ってきた、話をするにも力がはいってきたって！」

昨晩、東山塢でさまざまな事件が次第に醸成され、発酵しているときに、このふたりの共産党員はあかるいランプのもとで、仔細に書類に眼をとおした。それらの書類の中には、党の指示や政策、それに都会のブルジョア右派分子が共産党の整風を機会に農業の合作化を攻撃し、食糧の統購統銷を攻撃している材料もあった。かれらは読みながら討論し、互いに思想を啓発しあい、意見を補いあった。かれらは実際にそくした感覚でそれらの書類に書かれてあるひとつ、ひとつの事件、ひとつ、ひとつの文字を理解した。ひと夜のあいだに、蕭長春の心は畑の苗のように充分な養分を吸収し、滋雨に浴し、いちどきに大きく成長した。かれの眼はよりあかるくなり、勝利に対する確信はより堅固なものとなった。

村の入口にさしかかると、蕭長春は先にとびおり、車について走りながらたずねた。

「老王、先に家にいきますか、それとも事務所にいきますか？」

王国忠も車をとめてとびおりた。

「家にいこう。もうずいぶん石坊に会ってないからなあ。大きくなったろうな？」

蕭長春がこたえた。

「きかなくなるばっかりだ」

「おじさんがそういってたぞ。おまえの子供のときもきかなかったって。息子というものは、おやじに似るものさ」

「おれの子供のときは、あいつのように甘えん坊ではなかった」

王国忠は自転車を押して台地をのぼりながら、

「時代が違うのさ。いまの子供はみんな甘い蜜の瓶の中から生れてきたようなものだ！」
「そういえばそうだなあ。おれの子供のころの暮らしなんぞ、あの子とは比べものにならないほどつらかったものなあ」
「石坊は見込みがある。おまえの将来の希望だ」
蕭長春は笑った。
「話せば不思議なことだが、あの子の母親がこの世にいたときは、おれはあいつを可愛がることをちっとも知らなかった。一日仕事をして、または一日工作して帰って来て、あいつが泣いたりすると煩わしくてならなかった。ところがいまでは、なん日か見ないと会いたくなり、泣くのまで可愛く思うようになった」
王国忠がいった。
「人間は年をとると、子供のよさがわかるようになるものだ」
「別にそういうわけでもねえけれど」
蕭長春はそういった、あとの半分の言葉をかれはつづけなかった。
大通りにさしかかったとき、王国忠がいった。
「おれという人間は、なにをやるにもぜんたいに眼がくばれん。おまえの生活問題に対してもあまりにも関心がたりない。おまえはとっくにだれかを捜して家に迎えいれるべきだった。おまえ自身が必要なばかりでなく、おれたちの事業ももっと条理にかなった生活を、おまえがおくることを必要としているのだ。おじさんはまた気をもんでいることだろうな？」
蕭長春は笑ったが、なにもいわなかった。
石坊は自転車のチェーンの音を聞きつけて部屋からかけだして来た。小さな口をあけて呼ぼうとしたが、王国忠のすがたが眼にはいると、びっくりしてのみこんだ。ちっちゃな両の眼をくるくるさせて怯ずおずと見つめ、声をだすのもひかえている。かれは王国忠をさけて父親のほうにかけていくと、その身体に抱きついて、顔をあげて聞いた。
「とうちゃん、どうしてまた家に帰って寝なかったんだい？」
蕭長春は石坊のまっ黒な髪におおわれた頭をなでてやった。
「とうちゃんは会議にいってたんだ」

「よその子のとうちゃんは会議にいかないのに、とうちゃんだけいつも会議なんだね」
そばから王国忠が笑って言葉をかけた。
「なあーんだ、とうちゃんの尻っぽをひっぱるちびっ子落伍分子だったのか！　石坊、とうちゃんはおぼえていて、このおじさんにはあいさつもせんのかね？」
蕭長春は石坊を抱きあげると、その小さな顔にキスしてやった。
「おじさんとお呼び」
石坊は唇を動かすと、
「おじちゃん！」
とひと声、てれて父親の胸に顔を隠してしまった。
王国忠がその背をたたいた。
「いい子だね！」
そのときま向かいの院子から、すんだ声がひびいてきた。
「いらっしゃい！」
ふたりがいっせいにふり返って見ると、ざくろの樹の下に焦淑紅が立っていた。かの女はこっちに向かって笑いながら、裏門まで出て来て足をとめた。

焦淑紅は今日はとくべつに身なりに気をつけているようだった。とはいっても、半袖の上着に着かえただけなのだが。その上着はうっすらと青味をおびた白色で、美しい姿態にほどよくあった寸法、デザインにもひと工夫してあった。その上着にあわせた黒木綿の七分ズボン、白いソックス、モダンなかけひもつきの黒いコールテンの布靴、おちついて嫌味のない身だしなみである。
蕭長春は、かの女の容貌についてこんなにしみじみと眺めたのは、これがはじめてだった。そして、かの女がこんなにも美しく、その美しさがしっとりと内に秘められていて、素朴に人の心を魅了するのに気がついたのも、これがはじめてのように思えた。
焦淑紅がいった。
「王書記、わたしの家によってください」
王国忠がこたえた。
「淑紅、おまえの眼はまったくよくきくな！　遅くもなく、早くもなく、ちょうどよその家のしきいをまたいだときに声をかける、いまさらあとへひけないのを承知のうえで呼んでるんだろう」
「あんたは頭がまわりすぎるのね。わたしが声をかけた

のは礼をつくしただけですよ」
「どんなご馳走があるというんだね？」
「東山塢農業合作社を見くびらないでくださいよ。ほしいものはなんでもあるわ。二年たったら、あんたがしきいをまたいだとたんに、りんごや西洋梨をお腹がいっぱいになるまでご馳走するわ」
王国忠は笑った。
「聞いたか、なんとまあ期限の長い手形だろう」
石坊が父親の手をすりぬけると、とびはねて、
「梨がたべたい、梨がたべたい！」
と叫びながら焦淑紅のほうへかけていこうとした。それを焦淑紅がとめて、
「石坊、あわてちゃ駄目よ、梨はまだ樹にもなっていないのよ！」
淑紅の母親も娘の背後からすがたをあらわした。かの女の視線に先にはいったのは自転車で、それから人間に気がついた。老眼なので、しばらく眺めてからやっとわかり、
「まあ、王書記ですかい」
王国忠はかの女とあいさつを交した。
「おばさん、飯はすませましたかい？」
淑紅の母親がこたえた。
「すませましたよ、すませましたよ。淑紅、どうして王書記を家にお誘いしないんだね？」
「誘っても来ないのよ！」
「淑紅、この娘ったら、だれにでも遠慮がなくてねえ。王書記は身内同様だからいいけれど、これがしたしくない同志だったら、おまえの失礼なのをとがめるに違いないよ」
焦淑紅は笑った。
「もうとっくにとがめられたわよ！」
そういうと、また、ひとり笑いしながら部屋のほうへ去っていってしまった。
王国忠は院子の中へはいりながら、
「おまえたちふたりは向かいあわせに住んでいて、往き来にはとても便利だな」
蕭長春がこたえて、
「一年じゅうせわをかけてるんで。石坊の着るもの、使うもの、みんなあの母娘が手を貸してくれてるんです」
王国忠がたずねた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「振茂じいさんは最近どうだね？」
「とても積極的ですよ。中農ではいちばんだろうな」
王国忠がいった。
「見ろ、それがすなわちわが党の政策の勝利なのだ！これからも力をそそいで、かれらの進歩を助けてやってくれ」
蕭老大は部屋の掃除をしていたところだが、人声を聞きつけて迎えに出た。部屋の入口に立ったまま、かれは王国忠に声をかけた。
「へい、今日はどういう風の吹きまわしかね？」
王国忠が笑ってこたえた。
「東南風、追い風さ！」
それをうけて、蕭老大が、
「そんなこっちゃろうよ。追い風でもなければここまで吹き寄せられてくるもんかね。おれたちのことなぞすっかり忘れちまったに違いねえと思っていたよ」
王国忠は部屋にはいりながら、蕭老大の肩をたたいた。
「他の者を忘れても、とっつあんを忘れるもんかね！ここしばらく会議つづきで、会いにくるひまがなかった。身体は丈夫ですかい？」
「丈夫じゃよ。糠をくって生きてきた生命よ、こんないい時世にめぐりあって、長生きせにゃあ損じゃよ」そういうと蕭老大は急いでオンドルの場所をあけて王国忠に坐るようにすすめた。「ひまを見て少しはよってくだせえよ。泊れなくても顔を見せるだけでもいい！あんたら、長春を竿のてっぺんにおしあげといて、放ったらかしにしておいちゃ困るわい！」
王国忠はオンドルにあがってあぐらをかいた。かれにはオンドルの上であぐらをかく習慣があり、会議が長時間にわたっても、あぐらの膝をくずさず、それで太ももがしびれもせねばだるくもならなかった。一生の大半をオンドルに坐ってすごすばあさんでも、この点ではかれに及ばなかった。かれは蕭老大の言葉を聞くと、にこにこして、
「放ったらかしにしておいても大したことはない、よくやっているじゃないですかい」
「なにがよくやってるものかね、おれの見たところじゃあ、あんたは官僚主義じゃよ」
「とっつあん、このレッテルはずいぶんでかいなあ。話

してくれ、おれのどういう点が官僚主義なのか？」
「どの点が官僚主義？　はっきりしてるじゃねえか。他の者は知らねえだろうが、このおれはあの子が冷や飯をどれほどかっこんでるか、よく知ってるんじゃ！　駄目だ、あの子ひとりじゃ駄目じゃ」
「そのとおりだ。とっつあんの言葉はまったく実際的だ。長春ひとりだけでは駄目だ」
　王国忠はそういいながら、意味深長にそばに立って微笑んでいる蕭長春に眼をやった。
　蕭老大がいった。
「だからおれがいっとるんじゃ、あんたがあの子の腰をささえてやらにゃあ駄目だって」
　王国忠がこたえた。
「実際の話、おれたちみんなの力はまだまだ不足してるんだ……」
「郷書記はなんといっても、村書記よりは力があるべえが」
「いくらあっても駄目だ、いくら手が大きくても天をささえきれないのと同じでね。腰をささえる力は大衆のあいだから捜さなくては……」
「大衆？　老王、あんたはわしらの村の大衆を知ってねえんだ、落伍分子もいいとこよ！　首に縄つけてひっぱっても動かねえで尻ごみする者ばかりじゃよ」
　王国忠はまた笑った。蕭長春の巻いた煙草をうけとって吸いながら、
「とっつあんのその言葉は全面的じゃないな。大衆のぜんぶがぜんぶ遅れているとは限らないだろうが？　裕福な中農には思想の遅れた者が多いが、貧農・下層中農には進歩的な思想の持主が多いと思うがね！」
　蕭老大がいった。
「そりゃそのとおりじゃ。もし貧農・下層中農の思想がゆたかな暮らしの中農と同じだったら、とっくに屋台骨がくずれておるわい」そういうとかれは溜息をついた。
「ああ、貧農や下層中農はあいつらのように凄腕じゃねえからなあ！」
「貧農や下層中農をかれらと比べたら、一対一ではもちろん及ばない、しかしひとつに固まって当れば、そりゃ凄い力を発揮できる。いまのところそう凄くないのは、おれたちがみなを立ちあがらせていない、みなをひとつの力に固めていないからだ！　信用しねえんなら、とっ

つあんとおれとふたりで数えてみようじゃないか。思想の進歩した者は、遅れた者よりきっと多いに違いない。そうでなければ、東山塢の合作社が五、六年もつづくはずがない！」

郷党委員会書記の世間話は、そのひとこと、ひとことに目的があった。かれはいつ、いかなるときでも機会を捕えては、じぶんに指導される同志の思想の啓発につとめていた。言葉で教えるだけでなく、身をもって行動することによってみなを教育していた。

そばで聞いていた蕭長春は、見たところ平凡な世間話のようなこれらの会話が、そのじつはじぶんに対する教育であり、その言葉そのものが、じぶんの腰をささえているのだということを感じとっていた。

蕭老大は党委員会書記と話を交したので、とてもご気嫌だった。いま、かれが考えているのは、党委員会書記がじぶんの息子のために仇を討ちに来てくれたということではなく、息子にうしろ盾が来てくれた、息子はこの才能のある郷党委員会書記のたすけを借りて、いま眼のまえにおかれている困難を順調に解決でき、麦刈りをなんの障害もなくはじめられ、手順よく終えることができるということだった。息子の悩みがへり、息子がつらい目にあうのがちょっとでも少なくなれば、父親としてこれ以上満足なことはなかった。

みなはしばらく世間話に花を咲かせた。焦淑紅がじぶんの家からやって来た。かの女は花模様の魔法瓶を胸にかかえ、上等なお茶の葉を片手に握り、ひじでのれんを押しあけると、蕭家の東部屋にはいっていった。

石坊がとびはねながら近よって、手を伸ばして魔法瓶にさわろうとした。

「やあ、花がついてる！」

焦淑紅は身体をかわして避けながら、

「さわっちゃ駄目よ、駄目だったら、火傷したら大変よ！」

石坊がねだった。

「おばちゃん、おれんちにくれるのかい？」

焦淑紅がこたえた。

「わたしのこの甥ごは、まったく慾ばりねえ。大きくなったら、おばさんがいちばん上等なのを買ってあげるからね」

王国忠が口をはさんだ。

「おねえちゃんじゃなかったのかね、いつからおばちゃんに変身したんだ？」
焦淑紅はくるりと背を向けて魔法瓶の置き場所を捜しながら、
「これはわたしと石坊のあいだの内部問題よ、あんたたちに関係ないわ！」
蕭長春はしのび笑いをこらえながら、急いで土瓶を洗うと、お茶をいれた。
蕭老大は外の部屋に出ていってひとまわりしてから、門ののれんをかかげて首をつきだし、息子を部屋の外に呼びだして小声でたずねた。
「おまえたち、飯はまだだろう？」
蕭長春はうなずいた。
「うん」
蕭老大がたずねた。
「老王になにを馳走する？」
「おれたちは夜遅く寝て朝が早かったもんだから、水気のある飯がほしいんだ。米の粥でも煮てくれめえか、どうだい？」
蕭老大がこたえた。
「いいにはいいが、どこに米がある！　正月にくい残した少しばかりの米は、おまえが老四にくれてやったじゃねえか！」
「じゃあ、うどんの煮たのでもいい。淑紅に手伝ってもらってくれ」
蕭老大は両手をひろげて見せた。
「小麦粉もねえよ」
「メーデーにとっておいた小麦粉は？」
「おまえが工事場へいく日、啞が病気になり、その半分をじぶんでもっていってやったじゃねえか。あとの半分は、石坊がたべたがるんで、おれがたべさせちまったよ」
蕭長春はそれ以上ならべる物がなくなった。それでいった。
「ある物でまにあわせたらいいさ」
蕭老大は腹をたて、くるりときびすを返すとはやきたてた。
「みんなちょっぴりしか残ってねえわ。幹部になって、あちこちに知りあいも多いというのに、客が来たときにだせるような飯もねえ。土地改革してから九年もたつと

いうのに、こんな羞ずかしい思いをするのははじめてよ！」

蕭長春は笑って、

「気にしなさんな。内輪の者同士じゃないかね」

そうなだめると物置に使っている西の部屋にはいっていって見た。

その部屋はなん年も人が住んだことがなく、窓の障子紙も雨に吹きつけられて破れ、外から葦のむしろをかけているので日光が射しこまず、まっ暗だった。オンドルの上と地面に日常の家具などが置いてある他は、食糧を貯蔵してあるかめや罐が並んでいた。

かれは小さなかめを斜めにして中を見た。とうもろこしの粉がはいっている。手をつっこんでかきまわしてみた。あまり多くない。石坊と父親ふたりで十日や半月はもつだろう。つぎに小さな布袋をひきよせて、中に手をつっこんでみた。それは大豆だった。重さをはかってみると、あまり多くはないが、まだなん日かはもつだろう。それから素焼の容器に黄な粉、罐の中に麦ふすまが半分ほどはいっている。

かれは手についた粉を軽くはたきながら、

「よおし。充分だ。これだけあれば新らしい麦をわけるまでくいつなげる」

そう思うと、満足そうに部屋から出て来た。

焦淑紅もまん中の部屋に出て来ていて、地べたにしゃがんで手を洗いながら、顔をあげて蕭老大にたずねていた。

「王書記になにご馳走するの？　わたしがつくるわ」

蕭老大はくちばしをのばして蕭長春のほうをさすと、

「この家の面倒は見きれねえ。こいつに聞いてくれ」

そういうと身体をひねって、ほんとうにかまわないことを意思表示した。

蕭長春がいった。

「黄な粉の汁に、とうもろこしの餅子をあぶればそれでいいさ」

焦淑紅がさえぎって、

「お客を接待するのにそれじゃあよくないわ。王書記と一緒にうちにたべにいらっしゃいよ！」

蕭長春がいった。

「早く飯をすませて、やる仕事があるんだ。あるものだけで簡単にすませばいい」

焦淑紅は立ちあがると、手をふって水気をきりながら、
「うちから小麦粉をもって来て、ここでつくればいいでしょう?」
そういうと家に帰ろうとした。それを蕭長春がおし留めて、
「あるものですませりゃいいんだよ。麦秋がすぎてから、またおいしい物をつくってご馳走すればそれでいいんだ」
焦淑紅は蕭長春の顔を盗み見ながら、どうしていいか途方に暮れた。
蕭長春がかの女を促した。
「早くつくってくれ。王書記がうちに来て選り好みをすると思うのかね? そんな選り好みをする人間は、おれのうちになんぞ来ないよ」
蕭老大は腹をたてて、ふう、ふう鼻を鳴らしている。王書記どころか、一般の見知らぬ同志がかれの家に来たときでも、じいさんはいちばん上等の飯をつくって接待した。それが蕭老大の習慣であり、体面を重んじる蕭老大にとって、それはないがしろにできないしきたりだった。残念なことには、いま、心はあっても力が不足、まったく面子がたたないのだ。蕭老大は表門に立ったまま、このまま通りに出ていってどこかに身を隠してしまいたかった。
焦淑紅もかの女なりに考えていた。王書記はじぶんの尊敬する指導者だ、それに東山塢を助けて重要な問題を解決するために来てくれているのだ、丁重に接待するのは当然なことだ。その大切なお客が、いま、蕭書記の家に坐っている。蕭書記はどう接待しようかときっと頭を悩ましているに違いないと。
ところが蕭長春はちっとも気にかけていなかった。父親と焦淑紅のふたりがあまり真剣に心配しているので、
「こんな些細なことで気を使うんじゃねえ。おれたちのような人間にとって、客にいいものをくわせられねえということは、おれたちを発奮させる力になるじゃねえか!」
そういうと袖口をまくりあげて、じぶんで食事の仕度にとりかかった。
焦淑紅はその身体を押しやった。
「ここはわたしにまかせて、あんたは部屋にいって王書

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c